



中国における観音菩薩像発展の一研究 ―主として五代・宋時代の水月観音，白衣観音，楊柳観音を中心に―

潘，亮文

(Degree)

博士（文学）

(Date of Degree)

1996-03-31

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲1474

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1001474>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



氏名・(本籍)	潘 亮 文 (台湾)
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	博い第4号
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位授与の日付	平成8年3月31日
学位論文題目	中国における観音菩薩像発展の一研究 —主として五代・宋時代の水月観音, 白衣観音, 楊柳観音を中心に—

審査委員	主査 教授 百 橋 明 穂
	教授 濱 田 正 美 教授 池 上 洵 一

論文内容の要旨

本論文は、美術史的な立場から五代・宋時代における水月観音、白衣観音、楊柳観音の相互関係、そしてこれらの展開が元時代以降へどのように影響したかを明らかにしたものである。ことに中国の中原に伝わる観音諸作品がきわめて少ない中で、敦煌や四川などの中国の周辺部、また日本に伝わる諸作品を、その地域の特性に十分配慮しながら分析の対象として取り上げ、インドから伝来した観音像の、五代から元時代にかけての中国的な発展の諸相を解明したものである。

全体は五章からなり、まず第一章では晩唐から五代・宋時代の造窟になる四川省大足石窟の観音像の年記のわかる題記から、蜀の地、四川での当時の観音像の名称と図像とを比較検討した。宋時代の人たちに認識されていた観音の名称とその形象を対比させて分析した結果、観音の造像にあたっては、持物や図像には経典の内容にとらわれず、自由な発想が看取された。

第二章からは、唐代に大いに流行したインド伝来の観音像に対し、中国成立の観音、ことに比較的早く成立した水月観音から、白衣観音、楊柳観音の順に検討に入る。それらの観音像が浄土、法華、密教といった従来の仏教を基盤にしながら、次第にその図像に変容を加えてゆく過程を追及した。第二章の水月観音の検討では、千手千眼陀羅尼經との関係を新たに指摘することができた。水月観音は礼拝像としての性格から解き放たれ、九世紀前半に中原の長安から西は四川、東は江蘇まで広がり、十世紀前半には敦煌にまで及び、十世紀後半には浙江にまで伝播し、十一世紀後半には福建にまで広がったことを跡づけた。

第三章は、観音の中でもその性格や起源のわからない白衣観音を取り上げた。本来の白衣観音は密教の曼荼羅の中にほかの観音諸尊と共に描かれる。本論はこの正体不明の観音について中国での密教の修法の中に、この白衣観音のみを取り上げて行う白衣観音法が行われたことを指摘した。また、白衣観音の流布も禅宗の流行した宋の支配地域には、この単独の像が広まり、一方、密教系の白衣観音は周辺部の他民族の支配地域に流行したことを指摘している。

第四章は、楊柳観音について検討を加えている。一般に楊柳観音とされる名称も図像も漢訳經典にも明確ではない。観音が楊柳と水瓶とを持物として持つことは普遍的な観音の姿として認められてい

た。その楊柳を持つ姿は中国の古来からの人々の信仰に合致するものであった。

第五章は、これまでの個別の観音像の具体的な図像の検討からその結果を総合し、さらに唐宋間の画史画論などの文献資料をも駆使して、五代・宋時代の観音像の製作背景にわたって分析を行った。五代・宋時代の観音像は水墨画法による観音の出現によって自由な観音の図像的な発展を大いに促すことになった。魚籃観音や馬郎婦観音などが、宋時代以降、元時代にかけて成立する。これらのもっとも中国的な観音像の成立にとって、五代・宋時代の水月観音などの成立と豊かな展開こそがその重要な契機をなしたと結論する。

五章にわたる本論の構成はきわめて重層的であり、美術史における個別の作品分析の方法も適切であり、唐宋の画史画論をはじめ、中国史の文献の取り扱い方、ことに敦煌文献や仏教經典の博搜は注目に値する。

論文審査の結果の要旨

提出された学位請求論文は本文篇122頁（400字詰原稿用紙約366枚相当）と、図版篇（付図165図）からなる。

本論文は美術史的な立場から五代・宋時代における水月観音、白衣観音、楊柳観音の相互関係、そしてこれらの展開が元時代以降へどのように影響したかを明らかにしたものである。ことに中国の中原に伝わる観音諸作品がきわめて少なく、限られた中で、敦煌や四川などの中国の周辺部、また日本に伝わる諸作品を、その地域の特性に十分配慮しながら分析の対象として取り上げ、インドから伝来した観音像の、五代から元時代にかけての中国的な発展の諸相を解明した意欲的な論文である。中国で成立した水月観音、白衣観音、楊柳観音を主として取り上げたのは、観音像が中国で摂取・受容される中で、やがて中国の仏教や社会や文学と深く関わりながら、中国独自の観音像を成立させてゆく過程を実証するためである。

全体は五章からなり、まず第一章では晩唐から五代・宋時代の造窟になる四川省大足石窟の観音像の年記のわかる題記から、蜀の地、四川での当時の観音像の名称と図像とを比較検討した。宋時代の人たちに認識されていた観音の名称とその形象を対比させて分析した結果、必ずしも經典の記述と一致しない観音の図像が数多く見出された。観音の造像にあたっては、持物や図像には經典の内容にとらわれず、自由な発想が看取され、それが宋時代以降に観音像が多様な展開、ことに中国的な観音図像が成立する契機になったとした。この第一章は本研究の出発点であり、中国五代、宋時代の美術史、ことに観音造像の一般的な状況を確認する上で重要であり、第二章以下の具体的な観音像の検討を導き出す序章である。

第二章からは唐代に大いに流行したインド伝来の観音像に対し、中国成立の観音、ことに比較的早く成立した水月観音から、白衣観音、楊柳観音の順に検討に入る。そしてそれらの観音像が浄土、法華、密教といった従来の仏教を基盤にしながら、次第にその図像に変容を加えてゆく過程を、中国仏教の信仰体系の変化や中原と周辺地方との関係などに着目して結論を導き出している。まず第二章の水月観音の検討では従来水月観音図像の成立が華嚴經に基づいた補陀落山の観音浄土を表すとされていたが、共通するモチーフを説く別の經典である、千手千眼陀羅尼經との関係を新たに指摘する事ができた。また従来の伝統的な観音像が正面性の強い造形であるのに対し、水月観音はゆったりとした姿勢でくつろいでおり、礼拝像としての性格から解き放たれ、人間味を加えた水月観音の図像は八世紀後半に成立した。やがて庶民の間における補陀落山信仰とも結びついて、九世紀前半に中原の長

安から西は四川，東は江蘇まで広がり，十世紀前半には敦煌にまで及び，十世紀後半には浙江にまで伝播し，十一世紀後半には福建にまで広がったことを跡づけた。このような中国大陆における図像の成立とその伝播を跡づけた研究は数少なく，本論文の注目すべき成果である。

第三章は観音の中でもその性格や起源のわからない白衣観音を取り上げた。本来の白衣観音は密教の曼荼羅の中にはかの観音諸尊と共に描かれる。しかし密教系の白衣観音それ自身がすでにしてその成立や由来が明確でない。本論はこの正体不明の観音について中国での密教の修法の中に，この白衣観音のみを取り上げて行う白衣観音法が行われたことを指摘し，それが密教の曼荼羅の中からとりだして，単独の本尊として描かれる契機となったのではないかと推論する。また白衣観音の流布も禅宗の流行した宋の支配地域には，この単独の像が広まり，一方密教系の白衣観音は周辺部の他民族の支配地域に流行したことを指摘している。宋時代のきわめて中国的な新仏教である禅宗の勃興とともに，旧来の密教の中の一観音でしかなかった白衣観音が禅林の中で新たな図像として変容したのである。この指摘はこれまでにない新たな新知見といえる。

第四章はさらにその性格の曖昧な楊柳観音について検討を加えている。一般に楊柳観音とされる名称も図像も漢訳經典にも明確ではないが，観音が楊柳と水瓶とを持物として持つことは普遍的な観音の姿として認められていた。しかも観音の諸難救済の働きと手に持つ浄水と楊柳とによって，病気を癒し苦難から救うといった観音の基本的な性格をもっとも素直に表現し，またその楊柳を持つ姿は中国の古来からの人々の信仰に合致するものであった。よって観音像における持物としての楊柳は，化仏や蓮華といった従来の観音図像とともに，中国化した観音にとってきわめて自然に受容されたので，中国化した観音にとって楊柳を持つ観音をわざわざ楊柳観音と呼称することもなかったのではないかと推論する。中国の民衆にとっては普通の観音像として扱われるほどに一般化していたのであると結論づけた。

第五章はこれまでの個別の観音像の具体的な図像の検討から，その結果を総合し，さらに唐宋間の画史画論などの文献資料をも駆使して，五代・宋時代の観音像の制作背景にわたって分析を行った。五代・宋時代の観音像はそれまで伝えられてきた伝統的で重厚な仏教絵画のなかにあった観音像から，やがて水月観音や白衣観音・楊柳観音などが人間的な姿態として成立し，また水墨画法による観音の出現はさらに自由な観音の図像的な発展を大いに促すことになった。即ち伝統的な図像からはずれ，より自由闊達な図像を生み出したのである。より人間的な観音像として世俗的な人物像をモデルにした魚籃観音や馬郎婦観音などが，宋時代以降元時代にかけて成立する。これらのもっとも中国的な観音像の成立にとって，五代・宋時代の水月観音などの成立と豊かな展開こそがその重要な契機をなしたと結論する。

以上の五章にわたる本論の構成はきわめて重層的であり，美術史における個別の作品分析の方法も適切であり，唐宋の画史画論をはじめ，中国史の文献の取り扱い方，ことに敦煌文献や仏教經典の博搜は注目に値する。また広く日本に伝来した観音諸作品や仏教図像も視野にいれて考察の対象とするなど幅広く資料を収集し，しかも慎重に結論を導き出す姿勢は方法論的に高く評価できる。さらに中国仏教史や中国文学の知識も十分であり，日本におけるこれまでの研究と中国での最近の研究動向をも十分把握し，論文として見事な一体系をなしている。中国仏教美術史の研究の成果として高い評価が得られるものと確信させる。

以上の審査結果に鑑み，本審査委員会は，論文提出者潘亮文が博士（文学）の学位を授与されるに足る資格を有するものと判定した。